

## 書と詩8―書（画、舞踊など）・歌謡・詩・言葉・音・ことろ―

江戸時代の書は、大別すると、<sup>からよう</sup>唐様の書と<sup>わよう</sup>和様の書とに分けることができる。また書家の書、僧の書、学者の書、画家の書、政治家の書などに分けたりもする。

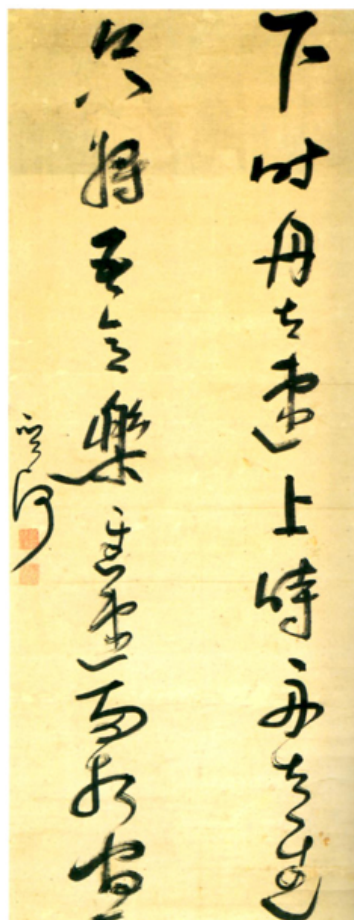
唐様の書は、<sup>ほくせき</sup>墨蹟の書法を受け継いだ北島雪山が創始者とされている。墨蹟とは、大徳寺・妙心寺の禅僧と黄檗派の禅僧の書のことである。墨蹟は、北宋の米芾、元の趙孟頫、明の文徵明・祝允明・董其昌などの書風を基にしている。それを受け継いだ北島雪山の書は、<sup>ほせいこうく</sup>細井広沢、<sup>じやくてん</sup>寂庵、池大雅らへ伝えられ、そして幕末の三筆へと継承されていたが、江戸時代の中頃から、<sup>しんどう</sup>晋唐の書風を提唱する者があらわれ、その後、唐様は、明清派と晋唐派の2派に分かれて継承されてゆく。幕末の三筆の市河米庵は明清派、巻菱湖・貫名崧翁は晋唐派である。この2派の流れは、明治時代になっても続いてゆく。

和様の書の代表は、江戸時代初期は御家流を継承した「寛永の三筆」（<sup>しょうかどうしょうじゅう</sup>松花堂昭乗、<sup>ほんあみうえつ</sup>本阿弥光悦、<sup>このえのぶただ</sup>近衛信伊）、中期は、幕府右筆の森尹祥・近衛家熙・加藤千蔭・池大雅らである。池大雅は唐様・和様と広く学んでいる。

### 学者の書

<sup>かんざん</sup>菅茶山（1748～1827）儒学者、化政期の代表的漢詩人。姓は菅波、名は晋師、号は茶山。唐様。

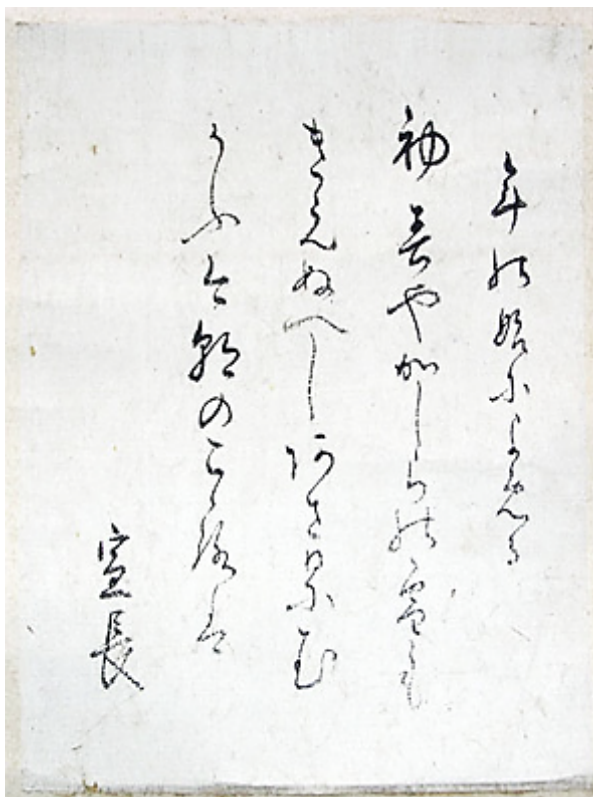
広島県福山市出身。門人に頼山陽らがいる。明末書の影響を受け、草書を得意とした。



菅茶山筆「五言絶句」紙本墨書  
121.4×48.2 cm 東京国立博物館蔵  
茶山書風の完成した時期の作品。

（自詠の絶句）  
下時舟太速  
上時舟太遅  
只将吾有楽  
遅速兩相宜  
晋師

<sup>もとりのりなが</sup>本居宣長（1730～1801）国学者、医師 三重県松阪市の出身 号は芝蘭、春庵など 和様の書  
本綿商小津定利の長男。鈴と山桜をこよなく愛した 書齋の名も「鈴屋」という。『源氏物語』を好んだ。数十年かけ『古事記』を研究し『古事記伝』全44巻を執筆した。



年の始によめる  
初春や かしらの雪も  
きえぬべし あさひにむ  
かふ今朝のころは

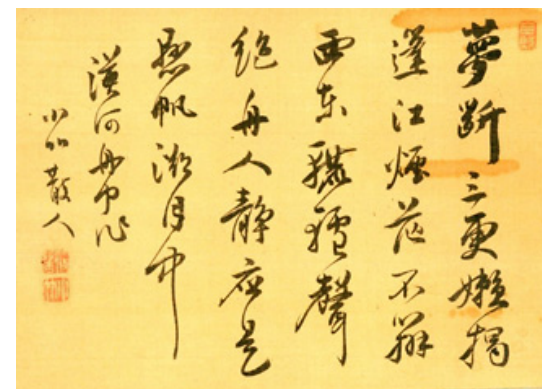
宣長



「本居宣長六十一歳自画自賛像」

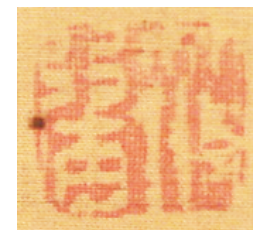
篠崎小竹（1781～1851）儒学者・書家 大阪出身 本姓は加藤 名は弼 号は小竹 唐様

医師加藤周貞の次男。13歳ころ篠崎三島の養子となった。詩・書・篆刻に優れる。



篠崎小竹「夢断」絹本 25×37 cm 七絶

夢断三更懶揭  
篷江煙茫不辨  
西東□□聲  
絶舟人静底是  
懸帆湖月中  
漢河舟中作  
小竹散人



篠弼

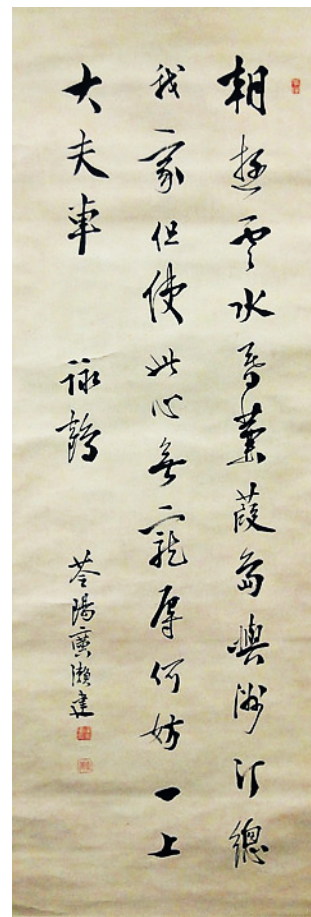


自然



小竹

ひろせたんぞう  
広瀬淡窓（1782～1856）儒学者・漢詩人・教育者 大分県日田市出身 名は建 号は淡窓 唐様  
門人に高野長英・大村益次郎・長三州らがいる。「敬天思想」を説いた。

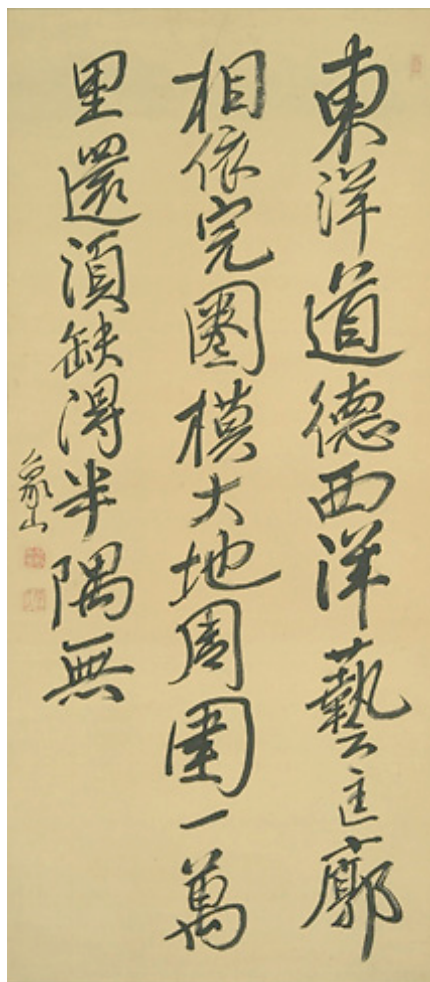


広瀬淡窓「鶴を詠ず」  
紙本 44.7×127.2 cm

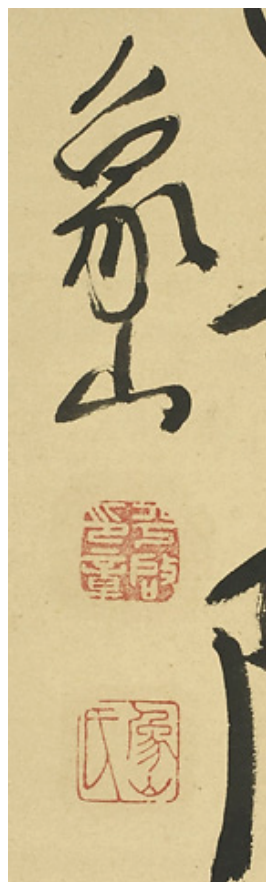
朝遊雲水暮兼葭 島嶼洲汀總我家  
但使此心無寵辱 何妨一上大夫車  
詠鶴 荅陽廣瀬建  
朝には雲間や水辺を飛び回り、暮には  
おぎやあしの茂みに憩う。  
小さな島々や中洲は、すべて私の家である。  
私はただ、自分の心が名譽や屈辱に左右されたくないのだ。どうして嫌おうか。仕官して立派な職責につくことを。  
鶴を詠ず。 荅陽廣瀬建

さくまじょうざん  
佐久間象山（1811～1864）洋風兵学者・思想家・朱子学者 長野市松代出身 門弟に吉田松陰がいる

妻の勝順子は勝海舟の妹。 勝海舟や坂本龍馬らに影響を与えた。唐様。三条木屋町で暗殺された（53歳）。



象山



落款 印

佐久間象山「題地球儀詩」七絶 136.8×60.3 cm 早稲田大学図書館

「東洋道德西洋芸 匡廓  
相依完圈模 大地周圍一万里  
還須欠得半隅無」  
東洋の道德、西洋の芸。  
匡廓相依依りて、圈模を完うす。大地は周圍一万里。還た、須らく半隅を欠くを得る無かれ。

東洋の道德と、西洋の技術。それぞれの長所を内蔵した箱が寄り合ってこそ、完全な球体となる。この大きな地球は、周圍一万里。東と西、どちらか半分が欠けてもいけないのだ。



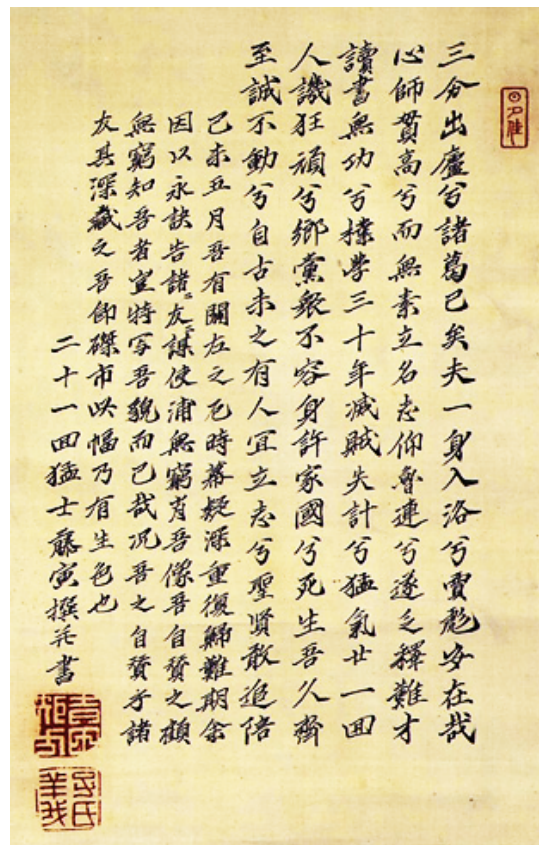
吉田松陰（1830～1859）兵学者・思想家・教育者 明治維新の指導者 松陰は号 通称は寅次郎

山口県萩市出身 門人に久坂玄瑞、高杉晋作、伊藤博文らがいる。安政の大獄で斬首刑に処された（29歳）。



松浦松洞画「吉田松陰像」  
1959年（安政6）5月制作  
賛は松陰 絹本着色  
99.1×35.8 cm（吉田家本）  
山口県文書館蔵

（賛文大意）私が尊敬する諸葛孔明や賈彪はもうこの世におらず、範としていた貫高や魯仲連のような功績を残すこともできなかった。こうした先賢の書を読み、国賊を滅ぼそうとしたが果たせなかった。故郷の人は私を非難するが、私は、国のために命を投げ出す覚悟はできている。誠意を尽くせば、心は通じると古くから言われているように、人は、是非とも高い志を立てるべきであり、（困難な状況でも）聖賢の志を私も敢えて追い求めたい。

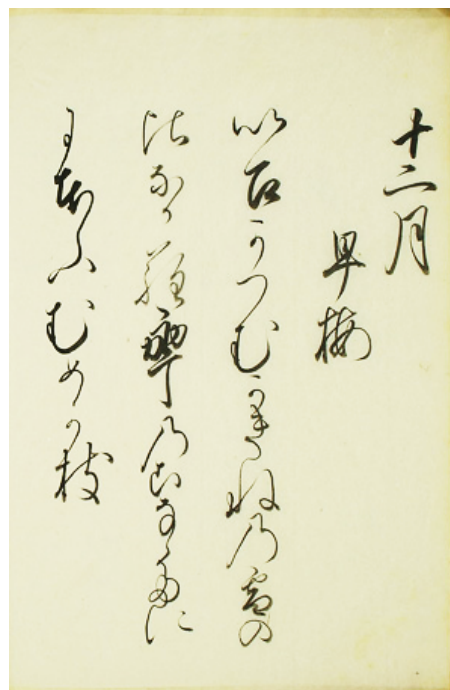


松陰の自賛部分 松陰は、この年の10月に処刑された。

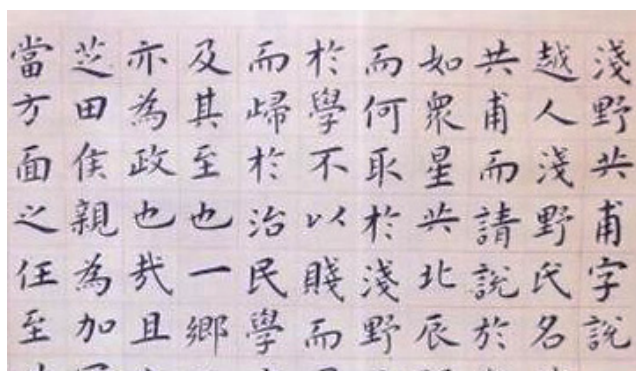
書家の書（前回載せなかった書家）



近衛家熙「書状」部分  
「先刻より六條へ参候 はや散々沈酔仕候 夜前ハ必可被成之旨・・・」  
近衛家熙（1667～1736）  
和様の書家 公家 号は予楽院  
上代様の書風の再興に努力した。



森尹祥「12月花鳥和歌」部分 1786年  
早稲田大学図書館蔵  
森尹祥（1740～1798）和様の書家  
持明院流の名人 幕府右筆



小島成斎「浅野共甫字説」部分 嘉永元年（1848）虞世南風楷書

小島成斎（1796～1862）

唐様の書家。福山藩右筆。

幼少時、市河寛斎・米庵に師事。

後、狩谷掖斎に師事し、掖斎から中国古書道の真髄を学んだ。



## 武士の書

やまおめてしゅう

山岡鉄舟（天保7年・1836〜明治21年・1888）政治家・思想家、唐様の書と剣と禅の達人

江戸生まれの飛騨高山育ち。号は鉄舟・一楽斎。通称は鉄太郎。15歳で、弘法大師流入木道51世の岩佐一亭から52世を授けられた。一刀正伝無刀流の開祖。鉄舟は、15歳から20年間、王羲之の十七帖を学んだという。慈雲尊者を日本の小釈迦とも言った。「幕末の三舟」のひとり。西郷隆盛との会見で知られる侍。

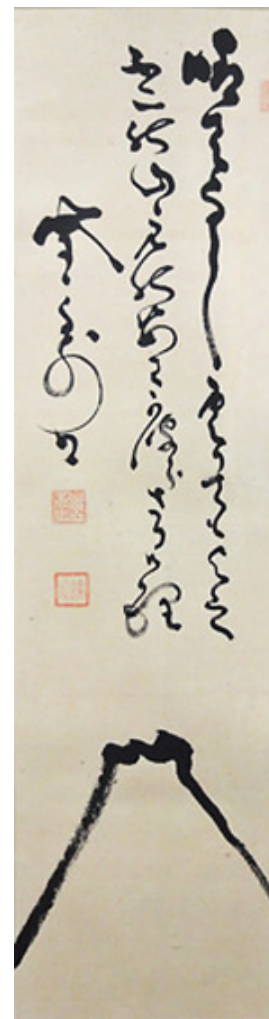


鉄舟書『『漢書』東方朔伝のことば』  
紙本 59.7×134.5 cm 個人蔵

「謙遜静愔、天表之応、応之以福」

謙遜・静愔には、天は応を表し、応ずるに福をもつてす。

謙遜で誠実な人には、天は必ず感応し、福をもたらす。



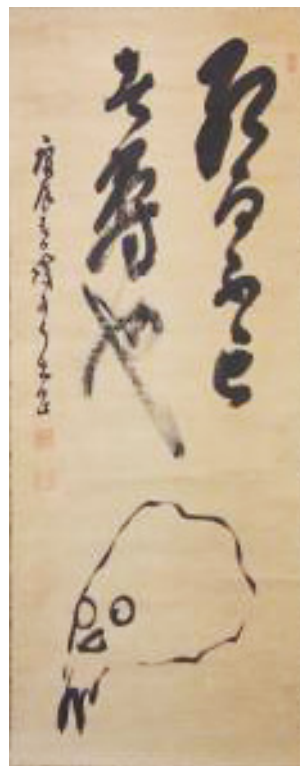
鉄舟書「富士画賛」個人蔵  
紙本 28.7×107.3 cm

晴れてよし  
曇りてもよし  
富士の山  
もとの姿は  
かわらざりけり

他にも髑髏の絵の賛に

「死にきつてみれば誠に楽がある  
死なぬ人には真似もなる  
まい」などがある。

鉄舟の人生の究極目的は、天地同根・万物一体の理を体験し、それを広めることであつたらしい。



鉄舟「頭蓋骨画賛」紙本  
133×51.5 cm  
「死して而も亡びざる者  
は 寿 し。」

たかはしでいしゅう

高橋泥舟（天保6年・1835〜明治36年・1903）武士、幕臣、徳川慶喜の側近、槍術の名人。

まさなり

旗本・山岡正業の次男として江戸で生まれる。号は泥舟。山岡家は、槍の自得院流（忍心流）の名家。泥舟の妹英子の婿養子が小野鉄太郎で後の山岡鉄舟である。母方を継いで高橋包承の養子となる。「幕末の三舟」のひとり。



泥舟「詩書」50歳頃の作品  
紙本 46.1×133.1 cm 個人蔵

南の土手の方では雲一つない空に月が出て、草は一層緑を鮮やかに見せる。  
西の方の林では早くも春らしく花がちらほらと咲き始めている。



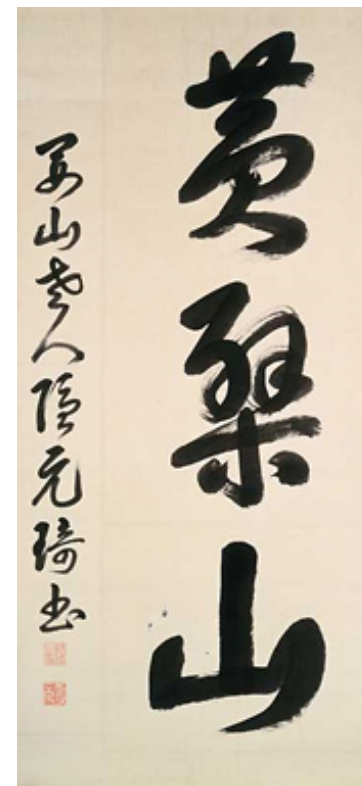
## 僧の書

### 「禅林墨蹟」 ぜんりんぼくせき

禅林墨蹟とは禅僧の墨蹟のこと。墨蹟の本来の意味は、書の真蹟という意味だが、日本では一般に墨蹟といえは禅林墨蹟のことをさす。墨蹟には、中国の宋・元代の禅僧のもの、日本の鎌倉から室町時代の禅僧のもの、江戸時代の大徳寺や妙心寺の禅僧のもの、黄檗宗のものなどがあるが、ここでは江戸時代の代表的な墨蹟だけを記す。

「黄檗の三筆」隠元・木庵・即非の三人。彼らの墨跡が唐様ブームの発端となった。

隠元隆琦（いんげんりゅうき）（1592～1673）明末清初の禅僧 1654年長崎に来航し、1660年黄檗山萬福寺を開創。



隠元書「額字原書」  
がくじげんしよ



木庵書「真機没覆蔵」51×31.6 cm

もくあんしやうとう  
木庵性瑠（1611～1684）

1655 年来日 黄檗山萬福寺第 2 世。



ちくりん  
即非書「竹林」33.8×87.8 cm 黄檗山萬福寺蔵

そくひにょいつ  
即非如一（1616～1671）

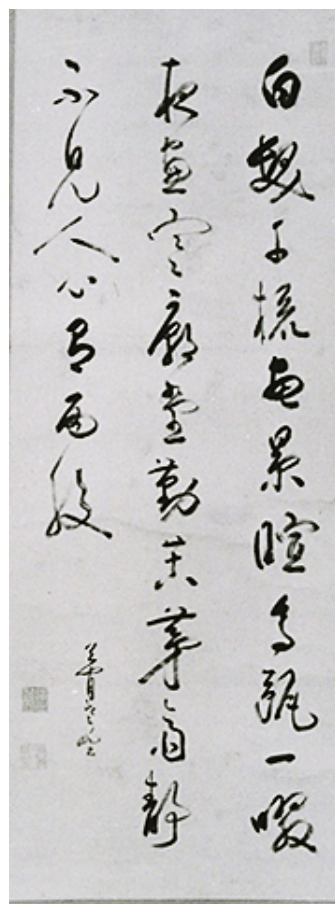
1657 年来日、長崎崇福寺の中興開山。

1663 年黄檗山萬福寺に移った。

ふくじゅじ  
北九州市の福聚寺の開山

臨済宗黄檗派（黄檗宗）の僧。

日本の文人画のさきがけと言われる絵を掻いた。



独立書「七言絶句」129.3×48.37 cm 京博蔵

どくりつしやうえき  
独立性易（1596～1672）

臨済宗黄檗派の禅僧

1653 年（57 歳）長崎に渡来し、亡命した。

1654 年、隠元によって得度し仏門に帰依。

日本に書法、水墨画、篆刻を伝えた。

日本篆刻の祖（初めて石印材に刻する印法を伝えた。）『書論』の著書がある。

本格的な書。唐様の先駆者。

白髪千梳晝景暄

鳥甌一啜夜窓寒

廟堂勤苦茅齋靜

不見人心有兩般  
（張横渠の「白髮」）



白隠「大燈国師像」部分 紙本墨画 129.5×42.6 cm  
串本応挙芦雪館蔵

大燈国師（宗峰妙超）は大徳寺の開山。この絵は大燈が東山五条橋の下で乞食をしていたという伝説を描いた、乞食大燈といわれる絵である。



白隠「死字」紙本 37.5×55 cm 串本応挙芦雪館蔵

「真正参玄衲子 先須大死一番」と書かれている。「大死一番」とは、死ぬ覚悟で何かをしてみること。



白隠「暫時不在如同死人」永青文庫蔵  
130×55 cm

「暫時も在らざれば、死人に如同す」一瞬たりとも、わが主人公たる仏心がお留守になるなら、死人も同じことだ。

「感動をやめた人は生きていないのと同じことである。」（アインシュタイン）

静岡県沼津市の生まれ。白隠の書は、戦後前衛書の出発点ともいわれる。臨済宗中興の祖と称えられる。1717年、妙心寺第一座となる。

白隠慧鶴（1686〜1769）



くもをおさめてやまあおし  
沢庵書「雲収山青」28.2×91.5 cm ミホミュージアム蔵

沢庵宗彭（1573〜1646）臨済宗の僧 大徳寺 153 世。兵庫県出石の生まれ。宮本武蔵とは接触はなかったという（小説上のフィクション）。

大徳寺の三筆（沢庵宗彭・江月宗玩・清巖宗渭の三人。日本風の墨蹟の始まり。）



せいがんそうい  
清巖宗渭（1588〜1661）臨済宗の僧。大徳寺第170世。

滋賀県の生まれ。書は張即之の影響を強く受けている。

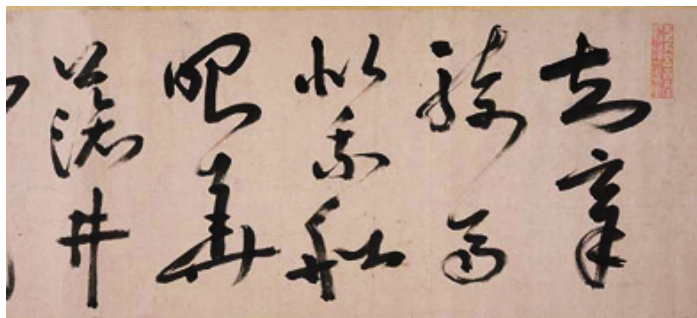
清巖書「雲吐峯」103.8×29.8 cm 流行した大徳寺もの。石川県立美術館蔵



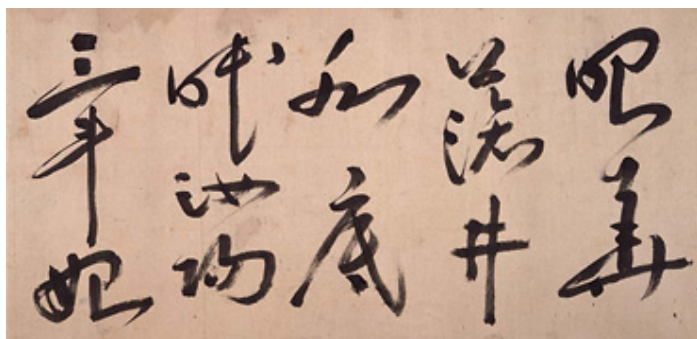
こうげつそうがん  
江月宗玩（1574〜1643）臨済宗の僧。大徳寺第156世。堺の生まれ。

江月書「雨中看果日」

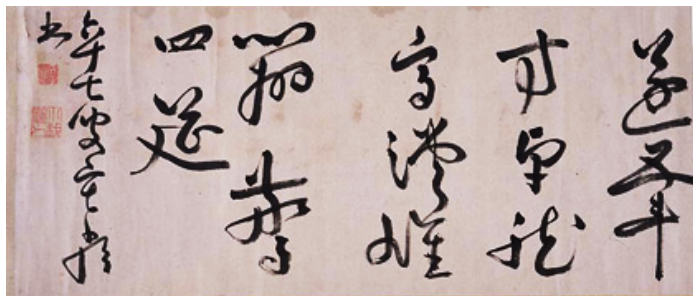




寂庵「飲中八仙歌」部分 1765年 28.5×675.3cm 東京国立博物館蔵  
「知章騎馬似乗船 眼華落井・・・」



寂庵「飲中八仙歌」部分  
「眼華落井水底眠 汝陽三斗始・・・」



寂庵「飲中八仙歌」部分  
「・遂五斗方卓然 高談雄辨驚四筵 六十七叟寂庵書」

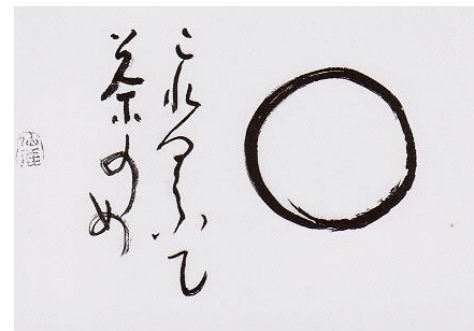
禅宗でない僧たちの書  
寂庵（1702～1771）真言宗の僧。悉曇<sup>ししたん</sup>の学者。悉曇とは梵語<sup>ぼんご</sup>のこと。百種におよぶ梵語についての著作がある。書の名手。良寛・明月・慈雲<sup>じうん</sup>とともに近世の「四大書僧」と呼ばれる。岡山県の生まれ。



仙厓「百寿老画と賛」 出光美術館蔵  
賛：百寿百人 都一萬年 猶是有限 故迎南星於天



仙厓「○△□」扶桑最初禅窟 紙本墨画  
28.4×48.1cm 出光美術館蔵



仙厓「円相」紙本墨画 26×42cm 出光美術館蔵  
賛：これくふて 茶のめ



仙厓「笑鬼画と賛」 出光美術館蔵  
賛：来年の事云た こたへむ こたへむ  
おや方 何に笑ふかい

仙厓義梵<sup>せんがいぎぼん</sup>（1750年・寛延3～1837年・天保8）臨済宗の禅僧、画家 岐阜県南部（美濃国）の生まれ。  
日本最古の禅寺、博多の聖福寺<sup>しょうふくじ</sup>の住持を20年間務めた。多くの禅画を残した。狂歌も有名。



**慈雲**（1718～1805）真言宗の僧。近世の「四大書僧」のひとり。大阪市北区の生まれ。号は葛城山人など。13歳で出家、その後、宗派を問わず学び修行した。雲伝神道の開祖。梵学を研究し『梵学津梁』約1000巻などを著した。



慈雲「達磨図自賛・不識」

紙本墨画 132.3×54.5 cm

大阪市立近代美術館蔵

達磨（5～6世紀？）はインドから中国に渡り、嵩山の少林寺で9年間坐禅したという。これは「面壁達磨」図である。

「梁の武帝、達磨大師に問う、如何なるか（是れ）聖諦第一義。磨云う、廓然無聖。帝曰く、朕に対する者は誰ぞ。磨云う、不識。帝、契わず。達磨、遂に江を渡りて魏に至る」（『碧巖録』第1則）



慈雲「愛山」（山を愛す）紙本 49.1×62.0 cm

愛と山が傾いて支え合い安定感を出している。深々とした余白である。



慈雲書「阿字（梵字）」絹本 32.8×20.3 cm

金剛寺蔵



「雙龍庵巖上坐禅像」 49×120 cm

龍王寺蔵

慈雲尊者80歳代の肖像と思われる。

賛

「山住は

げにはる秋のながめにて

かぎりをつかぬ

葛城の雲 慈雲叟」

**明月曇寧**（享保12年・1727～寛政9年・1797）真宗大谷派（浄土真宗）の僧。山口県生まれ。15歳で松

山の円光寺義空に師事。後、円光寺第8世住職。近世の「四大書僧」のひとり。字は曇寧、法名は明逸、号は明月・化物園など。酒を愛し、奇行が多かったという。詩文・書を能くした。徂徠学（古文辞学）を学んだ。書は堺の南山人（宜周）に習った。晋唐の書に通じ、蘇軾や懷素の書を研究し、草書を得意としたらしい。

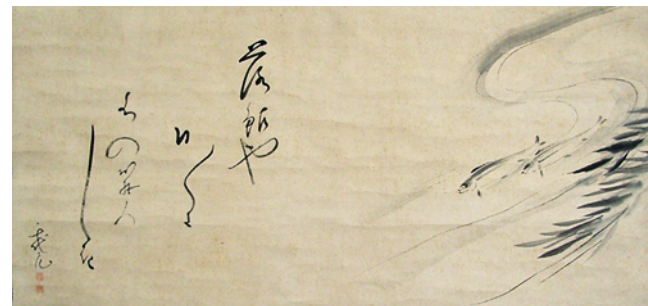


明月「仏法大海信爲能入」  
仏法の大海は信を能入と爲す



加賀千代尼・蓮月尼・貞心尼は、江戸後期の三大女流歌人、といわれる。

加賀千代尼（元禄16年・1703〜安永4年・1775）俳人 石川県白山市の生まれ。千代・千代女とも呼ばれる。千代は父から名づけられた俳号。号は草風 法名は素園 本名は「はつ」 表具師六兵衛と母つるの長女として生まれた。12歳のとき家を出て、あちこちで下女として働いたらしい。その頃、俳人・岸弥左衛門の弟子となる。北越地方では俳諧が大流行していた。千代女は16歳で地方の女流俳人として名を成し、17歳頃には各務支考にみとめられ、全国に知られるようになった。16歳頃結婚し、子も産んだが、1年余りで夫が病没し、子も亡くなり、実家に帰った、という説と、不嫁説がある。その後、父母や兄に不幸がつづき、表具師のあとを継いだという。52歳で家業を養子に譲り尼になる。1700余の句を残し、長い病のあとで逝去した。1764年、既白編『千代尼句集』を上梓した。その後『松の声』を上梓。千代は美女であったという。



千代尼「落鮎自画賛」紙本水墨 57.2×27.0 cm 個人蔵

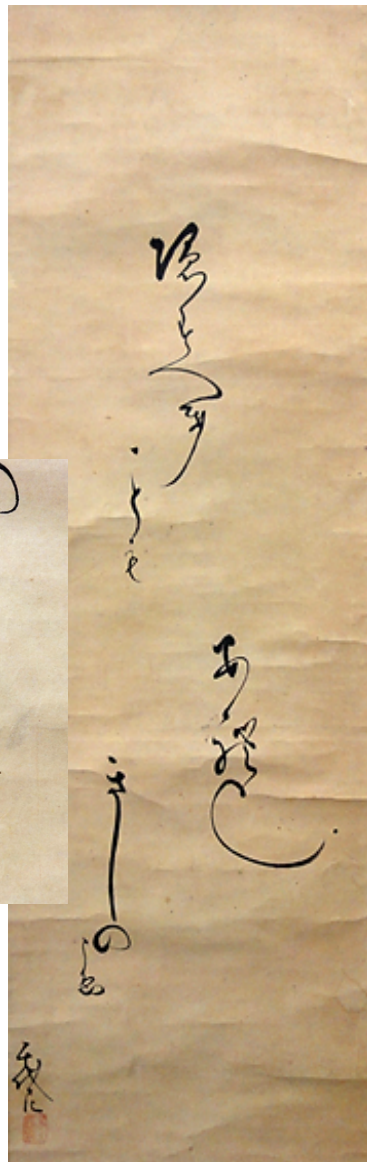


落鮎や日に日に水のおそろしき 千代尼

句は30歳前後の作だが、書画は50歳代と思われる。

「朝顔やつるべ取られてもらい水」が有名。

辞世の句は「月も見て我はこの世をかしく哉」

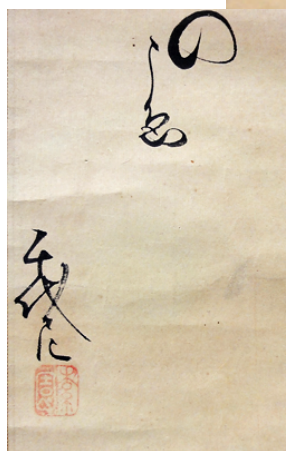
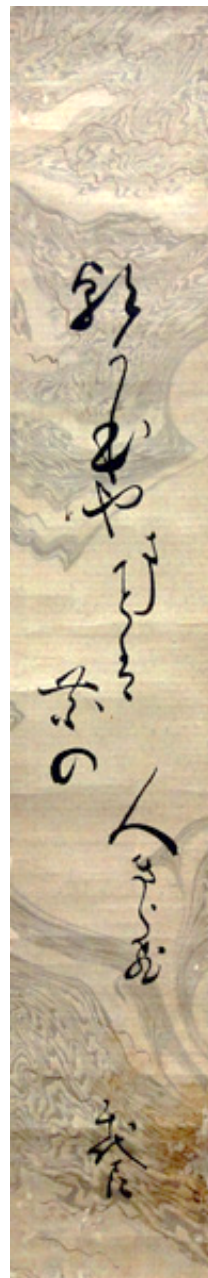


千代尼「句幅」紙本 22×70 cm 個人蔵

隠すべき事もあれなり雉子の声

朝顔や 誠は花の人ぎらひ 千代尼

短冊 5.9×35.8 cm



部分拡大

大田垣蓮月・寛政3年（1791）（明治8年（1875））尼僧・歌人・陶芸家・書家。

京都河原町三木の生まれ。絶世の美人だったといわれている。

実父は伊賀上野の城代家老藤堂良聖。実母は不明。（遊女？）

生後10日で知恩院の寺侍・大田垣光古の養女となり、

誠と名付けられた。生母は誠を出産後、

丹波亀山藩（今の亀岡）の藩士の妻となったという。

大田垣光古には5人の子がいたが若くしてすべて亡くなった。

で、1804年、光古は城崎から養子を迎え名を望古とさせた。

誠は7歳頃から16歳頃まで丹波亀岡城に女中奉公に出された。（生母の紹介が？）

そこで難刀・柔術などの武芸や和歌などを学んだ。この間に養母亡くなる。

奉公を終えた誠は文化4年（1807）頃、望古と結婚、一男二女が生まれたが、三人とも夭折、甥の齋治は誠

の次男かもしれない。文化12年（1815）放蕩無頼な夫は離縁され、その後すぐ亡くなり、誠は24歳で寡婦と

なった。大田垣家の新たな養子となった古肥と、文政2年（1819）再婚（28歳頃）。

一男一女が生まれたが、夫は文政6年（1823）病没。蓮月は32歳。息子も夭折？

夫の死の前日、養父光古と共に剃髪し出家、誠は蓮月、光古は西心と号し、

養父と娘と3人で知恩院真葛庵に住む。2年後に6歳で娘が亡くなり、

その7年後に養父西心逝去（1832年・蓮月41歳）。蓮月は、なくなり知恩院を去り、

岡崎村に移った。この頃の岡崎村は多くの文人が住む煎茶のメッカとなっていた。



「蓮月尼画像」部分 富岡鉄斎画 神光院蔵  
明治30年、鉄斎62歳の作。蓮月尼没後20年  
以上たってから描かれたもの。63.5×33.2 cm

常ならぬ世はうきものとみつぐりの 独りのこりてものをこそおもへ （蓮月）

かきくらしふるはなみだか無人を おくりし山の五月雨のころ （蓮月）

たらちねのおやのこひしきあまりには 墓に音をのみなきくらしつつ （蓮月）



知恩院内の真葛庵

岡崎村には6年ほどいたようである。蓮月は住居を転々とした。（「屋越し蓮月」と呼ばれた）

年に13回も越した年もあるという。そのころ生計をたてるために焼き物をはじめた。

当時煎茶道が流行していて、蓮月の焼き物は煎茶道のための器であった。

栗田神社近くの栗田焼の窯元や五条坂で焼いてもらっていたらしい。

蓮月の焼き物は、後に「蓮月焼」と呼ばれ、有名になる。

手すさびのはかなき物もちいでて うるまの市に立つぞわびしき （蓮月）



栗田神社参道の碑

蓮月は、聖護院村の富岡家の隣に引越してきた。京大病院構内から蓮月焼の遺物が発見されている。

嘉永3年（1850）頃、蓮月は鉄斎に出会う。蓮月59歳、鉄斎（本名は富岡猷輔）14歳頃である。

鉄斎は父の命により、蓮月宅に同居する。

鉄斎は侍童として暮らし、蓮月に孫のように可愛がられ、

学問や芸術の修業に励んだ。

蓮月は鉄斎の人間的な成長に大きな影響を与えたという。

嘉永4年（1851）東山七条の大仏方広寺に寄寓。

安政3年（1856）春、鉄斎の父の仲介で北白川の心性寺に寄寓（65歳）。

鉄斎は蓮月と寝食を共にし、岡崎土を寺まで運んだり、

作品を窯元に運ぶなど、製陶を手伝った。



京大病院構内で発掘された蓮月焼



文久2年（1862）、安政の大獄の難を避け、長崎に遊学していた鉄斎が帰京して、聖護院村の蓮月の旧居に私塾を開いた。蓮月は心性寺へ移る。

文久3年（1863）西賀茂に移住。（72歳頃）

鉄斎はこの頃から生活費を稼ぐために絵を描きはじめている。（26歳頃）

慶応2年（1866）春、75歳の時、西賀茂村の神光院の茶所に鉄斎と伴に引越した。ここが蓮月の終の住処となった。蓮月尼は世を避けて焼き物に没頭した。

明けたてば墳もてすさび暮れゆけば 仏をろがみ思ふ事なし（蓮月）

蓮月が60歳を越してから、「蓮月焼」や短冊が京名物のひとつとして有名になった。

この頃は「蓮月焼」は京みやげの最上のもので注文がひっきりなしで、お金が入るばかりになったという。

お金持ちになった蓮月尼は、布施行を亡くなるまで続けた。

布施行は、石田梅岩の石門心学の伝統らしい。

この伝統は蓮月から鉄斎へと引き継がれていく。

嘉永3年（1850）の畿内の飢饉のとき30両を奉行所に喜捨した。

文久2年（1862）独力で資金を出して丸太町橋を架けた。

慶応2年（1866）頃の飢饉では粥施行所にお金を喜捨した。

それ以外にも、様々な古着を買い込んで困窮している人々にたびたび配ったという。

慶応4年・明治元年（1868）正月、鳥羽伏見の戦で幕府敗北。明治政府樹立。

『蓮月・式部二女和歌集』刊。（77歳）

慶応4年、戊辰戦争（1868〜1869）が起こる。

うつ人もうたる人も心せよ 同じ御国の御民ならずや（蓮月）

あだみかた勝つも負くるも哀なり 同じ御国の人と思へば（蓮月）

明治3年（1870）近藤芳樹編の蓮月歌集『海人の刈藻』刊。（79歳）

明治8年（1875）10月末、腸チフスに罹り、12月10日、入寂。

入寂の何年も前、蓮月尼は死出の旅支度をしていた。

白木綿の一反風呂敷に、月と蓮を鉄斎に描かせて、

遺体を包む布を準備し、そこに、次の辞世を書き添えた。

ねがはくはのちの蓮の花のうへに くもらぬ月をみるよしもがな（蓮月）

材木の屑切れをもらって棺桶も準備していた。

棺桶内の経帷子にも、次の辞世を書いた。

ちりばかりころにかかる雲もなし けふをかぎりの夕暮れの空（蓮月）

入寂の二ヶ月あまり前ころから尼僧寂黙が看病した。蓮月尼は寂黙尼に、

「無用の者が消えてゆくのに多用の人を煩わすにはおよばない、

知らせるのは鉄斎だけにしてほしい」と頼んでいたという。

しかし、別れを悲しむ西賀茂村の村民総出で弔ったとのこと。

神光院の西にある西方寺の近くの小谷墓地の桜の大樹の根方に、

鉄斎の筆で大田垣蓮月墓と刻された小さな墓がある。

小谷墓地は当時は共同墓地であった。

蓮月尼の手柄にピッタリの素朴で清楚な自然石（鞍馬石）の墓石である。  
山里は松の声のみきゝなれて 風ふかぬ日は淋しかりけり（蓮月）



小谷墓地にある蓮月尼墓



桜の大樹の根方にある墓



茶所の左奥の蓮月尼碑  
これも鉄斎の字



神光院内にある茶所（蓮月庵）



神光院本堂前にある歌碑  
宿かさぬ人のつらさを情  
にて おぼろ月夜の花の  
下臥



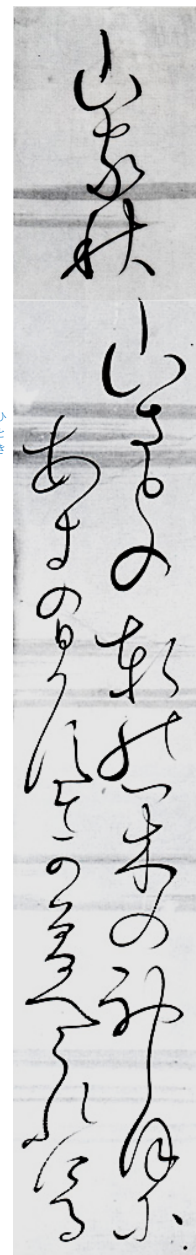
神光院（北区西賀茂）真言宗の寺

## 蓮月尼の書

蓮月は女中時代に、当時主流であった御家流の習字手本で、御家流をしつかり身につけたようである。40歳前後まで、御家流の字を書いていた。その後、陶芸をはじめ、その陶芸が蓮月の書を変えてゆく。

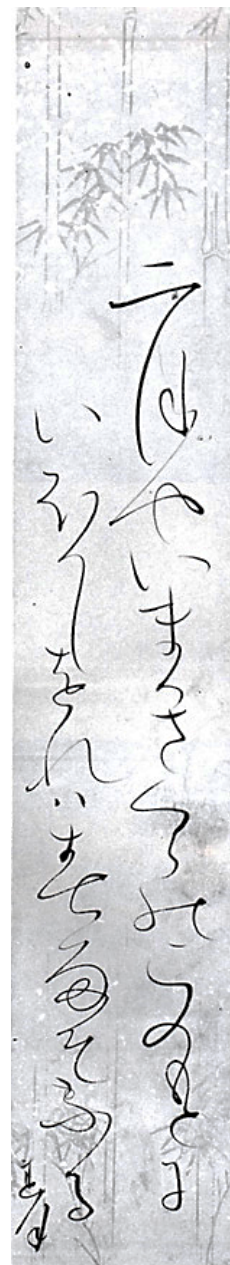
徳田光圓氏の論考を参考に少し見てみたいと思う。それによると、蓮月の書は三つの時期に大別できるといふ。

- 一、短冊の裏に署名があるもの。(最初期のもの)
- 二、短冊の表に署名をはじめた時期のもの。
- 三、作品に署名と年齢を記入した時代のもの。



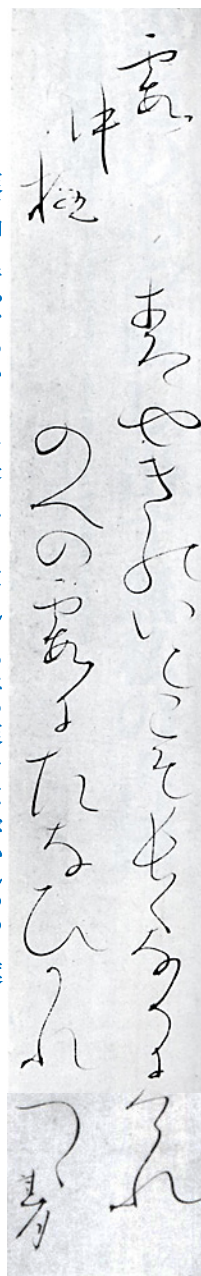
山家秋 山ざとの軒の一本の初しほに ひととき あきの日かずぞかぞへられける

これは最初期の短冊(40歳頃) 書風は御家流の亜流 署名は短冊の裏面にある。御家流の特徴は、線が鈍い。線に細太の変化が大きい。文字の大小の変化も多い。連綿線が多い。全体構成が騒々しく、すっきりしない、懐が狭く字の中の余白が細切れ、線質は軽く、筆先が浮いている、など。日暮れて道遠し、である。



二月や いまかさくらの このもとに いほりしをれば春雨ぞふる 蓮月

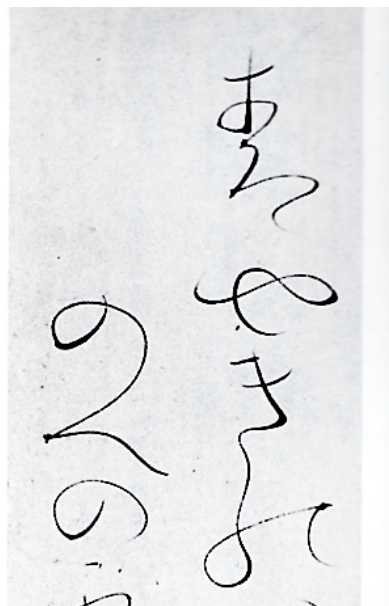
右の短冊は50歳中頃のもので、陶芸をはじめて10年が過ぎ、陶芸で生活できるようになってきた頃の作。陶刻書の影響からか、連綿が少なくなり、線の太さに極端な変化がなくなり、一字の懐が広くなり、御家流とは少しちがってきている。しかし、まだまだである。書に開眼するまでに、あと10年はかかる。途遠し！



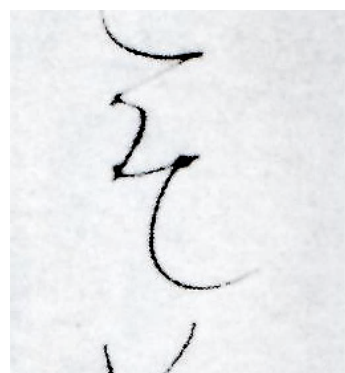
霞中柳 青やぎのいとこそ長くなりにけれ のべの霞にたなびかれつつ 蓮月

右の短冊は70歳代中頃のもの。蓮月流が完成。40歳頃から30年以上を経てやっとである。

連綿がほとんどない。字形が扁平になり、収筆が水平にはじき出されている。面相筆特有の転折と強い突き返し。澄んだ淀みない線質。柳葉筆から面相筆にかわり、歯切れの良い線になり、筆鋒が線の中を通り出すようになる。



部分拡大 収筆が水平方向へ払われている。陶器に和歌を刻すことによってうまれた横長の字形(瓜形字形)の誕生。



部分拡大 面相筆特有の転折とリズムカルな強い突き。





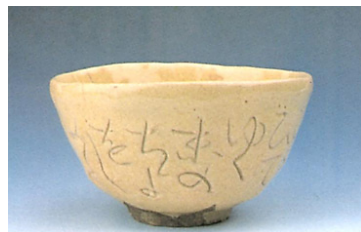
蓮月作「急須」  
万世も堪えぬながれと湿つらん  
その亀の尾の山の下水

自詠の和歌を釘彫りで刻した陶器。  
在世当時から模造品が多い。蓮月は、  
役にたつて喜んでいたという。

れんげつやき  
蓮月焼



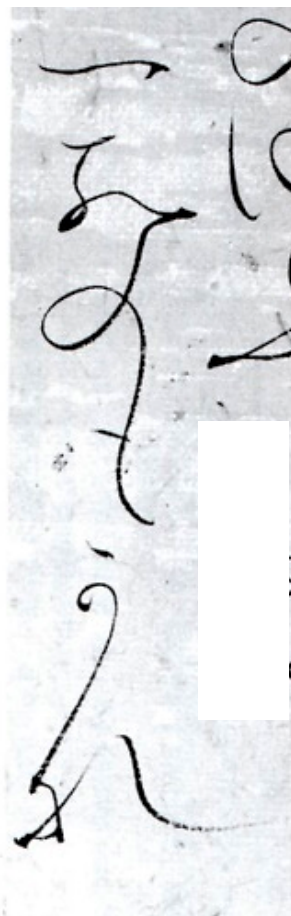
蓮月作「徳利」83歳 6.6×11.8 cm  
うかれ来て花のの露にねむるなり  
こはたが夢のこてふなるらん



蓮月作「茶碗」75歳頃作  
口径12×高さ6.3 cm  
世のちりをよそにはらひて行末  
の千代をしめたるやどの松風



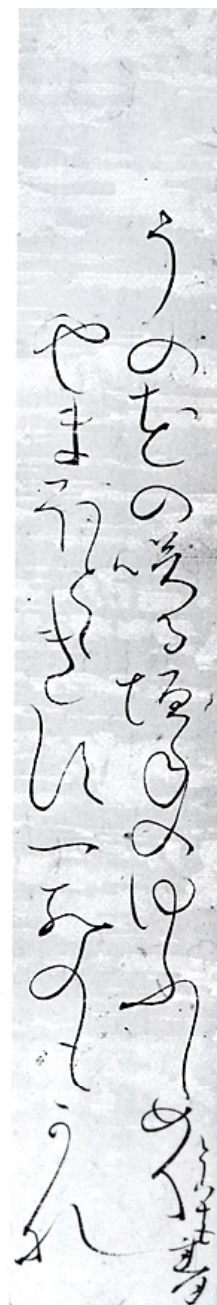
蓮月「菓子鉢」81歳 口径20×高さ11.2 cm  
世の中のちりもにぎりもながれては  
清きにかへるかもの川波



蓮月尼は、75歳頃から死の時までの10年ほど、神光院茶所に閑居し、俗客を避け、孤独と静寂のなかで歌や焼物作りに打ち込んだ。この間につくられた、歌と書と焼物が一体となった創造物は、蓮月尼が理想とした夢の形である。

これは83歳の作。蓮月尼は、ザーと求め続けていた世界と、ついに出会ったのだらう。心と筆が一体となった書は、蓮月尼がそこにいるかのようなのである。良寛と近い境地に到ったのではないだろうか。

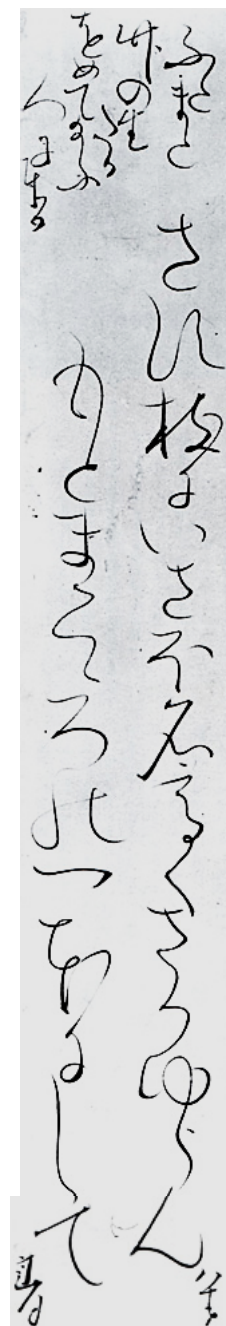
うの花の咲ける垣わのゆふじめり やまほととぎす一声もかな とし八十七蓮月



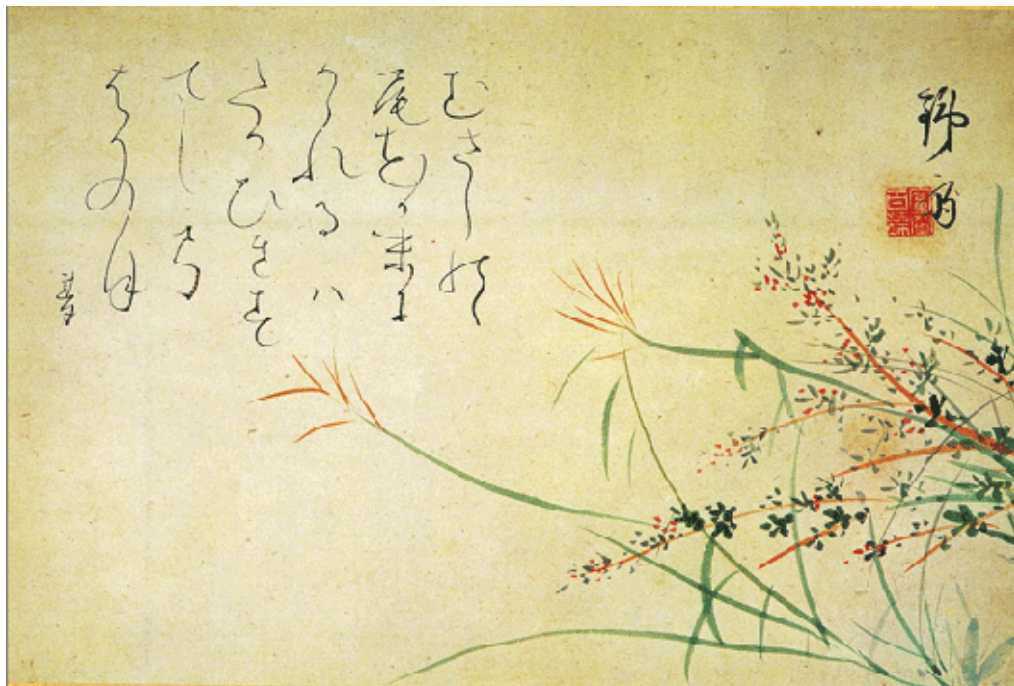
右は80歳の作。満では78歳か。作品が多い77歳から79歳の頃は、最も円熟した時期だったと思われる。紙面から筆が舞上がり、宙を舞って無限の時間と邂逅し、生き生きとした力強い線になって紙に刻される。筆の上下動の見事さ。この頃から曲線的な字形に直線の縦線が書かれはじめている、という。

さす枝にいさほ名高くさかゆらん もとまごころの一本にして 八十才 蓮月

ふたまた竹の生たるをめでとふ人に奉る





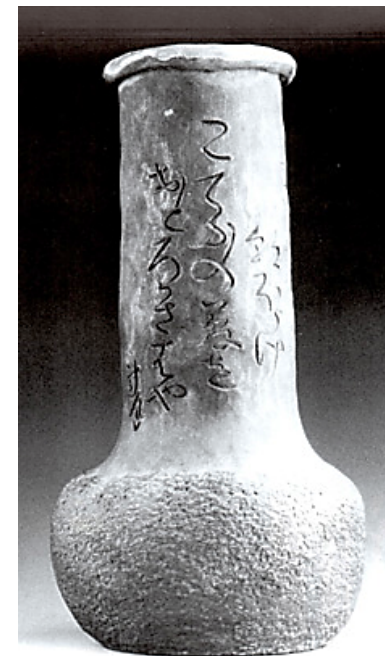


蓮月賛「秋草図画賛」75歳頃 33×49 cm 鉄斎画 鉄斎美術館蔵  
武蔵野の尾花が末にかかれるは たがひきすてし弓はりの月 蓮月

蓮月は、栗田の老女から陶器づくりをすすめられ、偶然、作陶をはじめたという。  
江戸時代の文人趣味の流行にともない、文人や上流階級に煎茶が流行し、蓮月焼は多くの人びとから歓迎された。  
当時、京焼は、伝統的な栗田焼と五条坂の清水焼とに分かれていた。職人たちから素人芸と思われていた蓮月焼は、信楽式の紐作りで、自詠の和歌を鈎彫りしたことで、この京焼の世界に新風を吹き込んだといわれている。

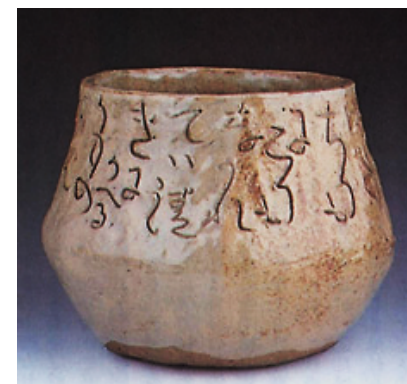


右の花子の部分



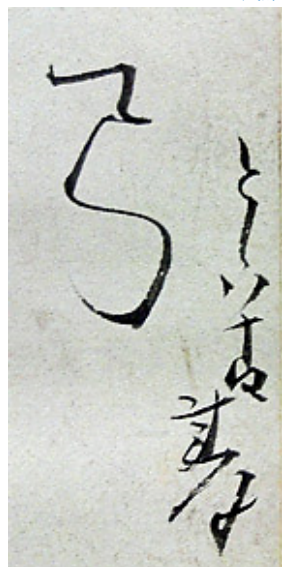
蓮月作「和歌彫小皿」85歳 各径10 cm

上段右より  
鶯のみやこにいでん中やどに かさばやとおもふ梅咲にけり  
うかれきて花のの露にねむるなり こはたがいめのこてふなるらん  
わがやどの垣ねばかりに有明の 月とみるまで咲るうの花  
ゆく末のさちとよはひをふた葉にて ちとせをまつやひさしかるらん  
このきみはめでたきふしをかさねつつ 末のよ長きためしなりけり



蓮月「水指」79歳 高さ13.2×胴径13 cm

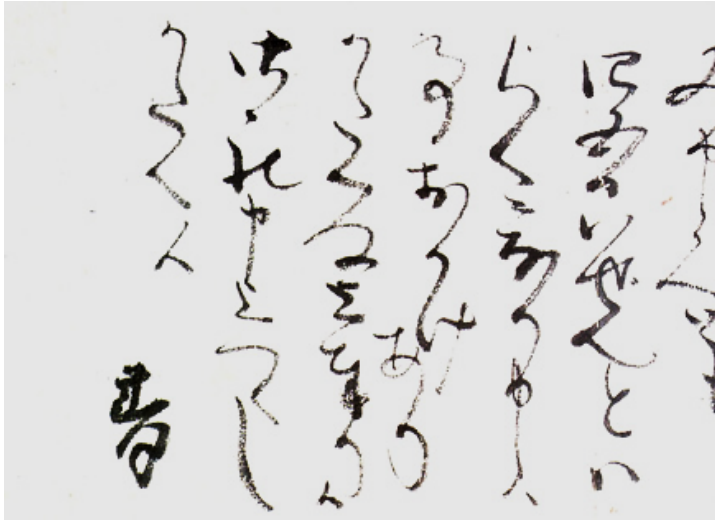
世の中のちりもにごりもながれては  
清きにかへるかもの川波



とし八十四蓮月

有名になつていた蓮月は、無名で売れない画家鉄斎のために和歌の賛を入れ、絵が売れるように助けた。蓮月は、鉄斎のために和歌を書いた懐紙などを何枚も与えたという。鉄斎が絵を先に描き、後で蓮月が賛を入れたこともあっただろう。鉄斎の父の富岡維叙と蓮月は友人で、蓮月尼の一人住まいを心配して鉄斎を蓮月のもとに住みこませたらしい。  
富岡家は代々、石門心学を家学としてきた家柄であった。石田梅岩を開祖とする石門心学は江戸時代後期に大流行した町人のための生活哲学である。「正直・儉約・勤勉」の三徳を重んじ、「本心の学」を唱えた。本心とは自然のこと。

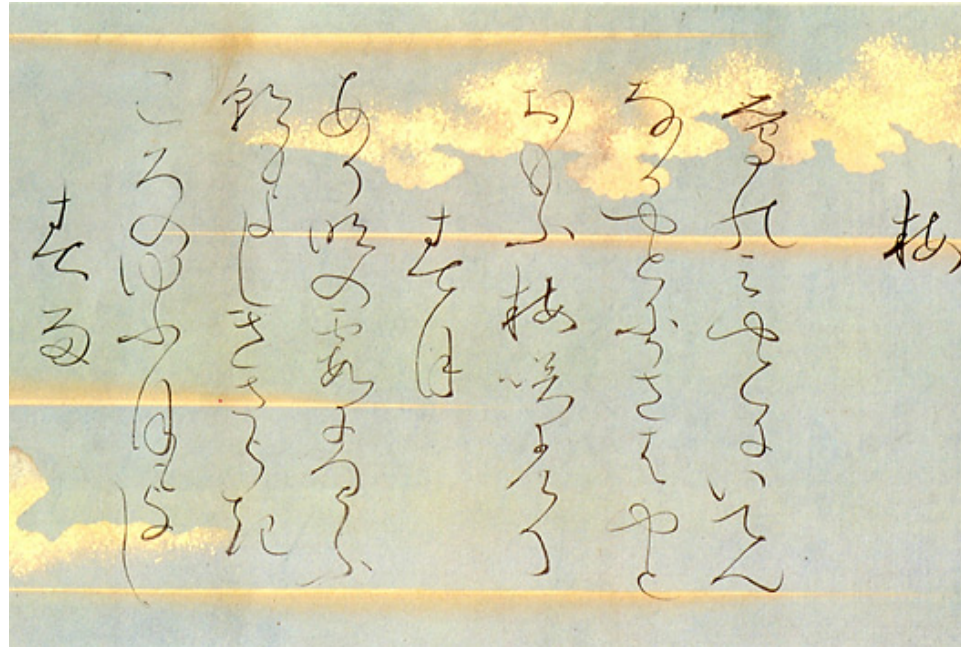




蓮月筆「神光院宛絶筆書簡」85歳 16.4×58.7cm 部分

「の申候へとも  
四五日いぜんとハ  
らくになり申候  
事おかけあり  
かたく存上奉り候  
御札申上つくし  
かたく候 蓮月」

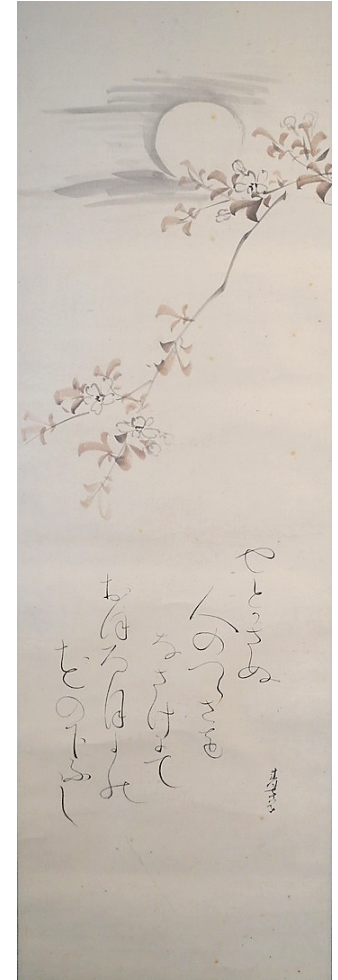
死の3日前に病床から神光院の智満和上に宛て書かれた手紙。  
蓮月のため断食祈禱をつづけた和上へ感謝の気持ちを述べたもの。  
死の直前とは思えない生き生きとした力漲る線である。



蓮月作「和歌巻子」19.8×374cm 巻頭部分 81歳 青色料紙に36首が書かれている。神光院蔵

「和歌巻子」は、神光院の智満和上に贈ったもの。  
詞書のあとに一首を3行に書いている。  
書風は完成された蓮月流（瓜形字形）。  
梅  
鶯のみやこにいでん  
なかやどにかさはやとおもふ梅咲にけり  
春月  
あり明の霞に匂ふ  
朝もよしきさらき  
ころのゆふ月もよし  
春雨  
越路より四方に照らしし玉手匣 あけみのうしの亡きぞ悲しき（蓮月）  
これは、曙覧の死をしのいだ蓮月が詠んだ悼歌。  
蓮月の現存歌は約900首。四季や日常生活が、書風と同様、優美に繊細に女性らしく表現されている。

蓮月は和歌を千種あり（ちぐさあり）と学び、香川景樹、六人部是香に入門（蓮月60歳のとき入門）、小澤蘆庵に私淑した。蘆庵は「ただごと歌」を提唱した歌人。  
ただごと歌とは、自然な感情を平易な語で、感じたまま、ありのままにうたう歌のこと。  
1861年秋、橘曙覧が息子の今滋と共に蓮月を訪ねてきた。曙覧は万葉調の生活歌を詠んだ孤高清貧の歌人である。



蓮月作「桜と月自面賛」  
宿かさぬ人のつらさを情にておぼろ月夜の花の下臥  
蓮月七十八才

貞心尼 ていしんに (1798・寛政10～1872年・明治5) 曹洞宗の尼僧 良寛の弟子 歌人

俗名は、奥村ます 法名は孝室貞心比丘尼、孝室貞心尼。新潟県長岡市の長岡藩士奥村五兵衛の次女。

2歳のとき母を亡くし、継母に厳しく育てられた(いじめられた)という。

文学、学問好きの美少女だったらしい。内職をして家計を助け、余ったお金で筆や紙を買って学問に励んだという。貞心尼は並外れた美人であった。孤独な境遇に育ち、感受性豊かで、夢みがちな才女であったらしい。

筆跡は、伸び伸びとし、豪放で男性的、率直で積極的な人柄であったかと想われる。相馬御風は次のように書いている。「貞心尼は字も能く書き、歌も能く詠み、文章も能く書いた・・・かなり勝気な性質の女であつたろうことも窺われる。」(相馬御風『貞心と千代と蓮月』より春秋社 1930年) しかし、本当のところは分からない。

文化11年(1814) 16歳で漢方医の関長温と結婚したが、性格が合わなかったのか、夫の放蕩のせいか、

文政3年(1820) 22歳頃離婚。柏崎郊外の新出の山に庵を結んでいた眠龍、心龍の二人の尼僧を訪ねて出家した。並外れた美貌の貞心尼は土地の人びとの噂の種となり、「姉さ庵主」と仇名されるようになったらしい。

文政9年(1826) 3月、28歳、長岡・福島村の閻魔堂に移る。良寛の噂を聞き、弟子になるため、4月初め頃、島崎の木村家を訪問。しかし、良寛は他所に仮住まいしており会えなかった。夏にも再度訪ねて行つたようだが、まだ良寛は帰ってきておらず、貞心尼は手作りの手まりに手紙を添えて置いて帰った。たぶん、この年か、

文政10年(1827)の秋、ふたりは初対面したと想われる(良寛69歳、貞心尼28歳の年である)

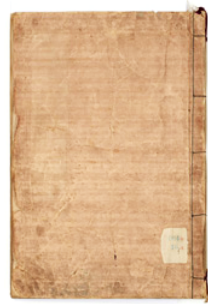
弟子になった貞心尼は、あこがれの良寛に逢うために、福島村から、難所といわれる塩入峠を越えて、島崎まで4年ほど通うことになる。村人たちは、二人の仲を噂し心配したが、二人は一向に意に介する風ではなかったという。貞心尼は文学少女時代からあこがれていた西行や芭蕉のような人(良寛)に逢えたのである。良寛への彼女の愛が真実であることは、良寛の死後の彼女の行動をみれば明らかである。

天保2年(1831) 1月6日、良寛遷化(73歳)。貞心尼33歳。

天保5年(1834) 貞心尼は良寛の肖像画を松原雪堂に頼み、賛を書いた。

賛は「うきぐものすがたはこゝにとどむれど心はもとの空にすむらん」

天保6年(1835) 5月1日、『蓮の露』完成する。37歳。



『蓮の露』表紙

『蓮の露』は、貞心尼が良寛の思い出を残すために、良寛の略伝や良寛の和歌や二人の贈答歌などを収めて冊子にして、良寛の死後40年以上にわたり、肌身はなさず持ち運び、秘蔵しつづけたものである。すべて貞心尼の自筆で、書風は、良寛に習ったであろう『秋萩帖』風である。字というものは、尊敬する人に似るものである。

### 『蓮の露』

和紙を袋とじにした冊子本。表紙と裏表紙と、100頁からなる。縦24 cm、横16.5 cm。柏崎市立図書館蔵。構成は、序文と本文からなる。序文は1頁から7頁まで、良寛の略伝とこの冊子編纂の動機などを記述。

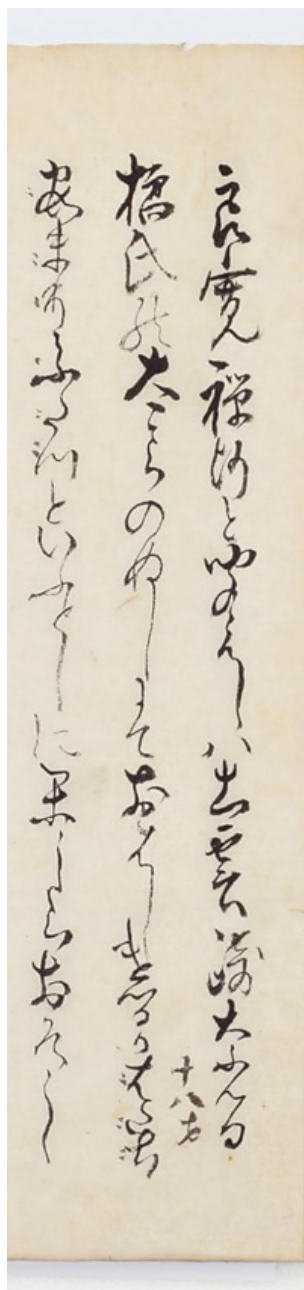
本文は9頁から83頁まで。良寛の歌151首、俳句1首、良寛作の俳句8首、良寛と貞心合作の短歌1首など。

良寛と貞心尼唱和の歌、不求庵のこと、山田静里翁のこと、良寛禅師戒語、「蓮の露」の命名のことなど、本文の最後に良寛の亡くなった日が記されている。他人によって編纂された最初の良寛歌集である。

良寛禅師と聞えしは出雲崎なる (十八才)

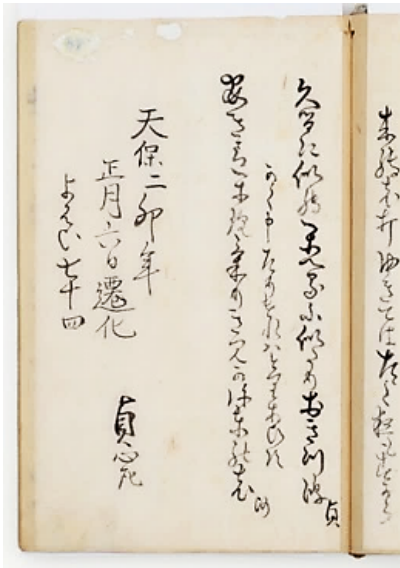
橋氏の太郎のぬしにておはしけるがはたち

あまりふたつといふとしかしらおろし

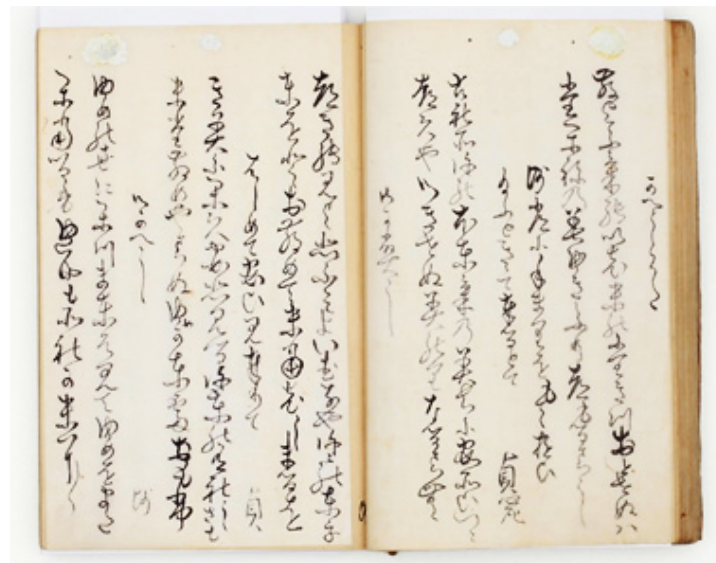


『蓮の露』序文冒頭部分

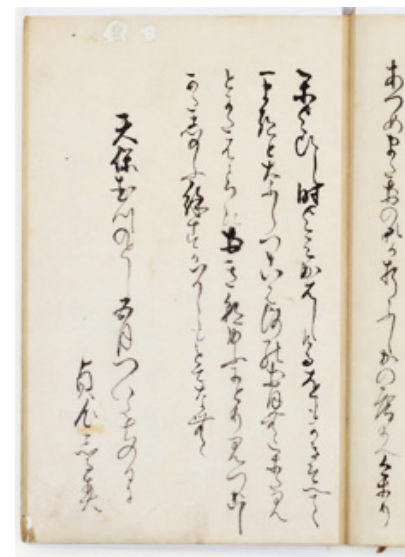




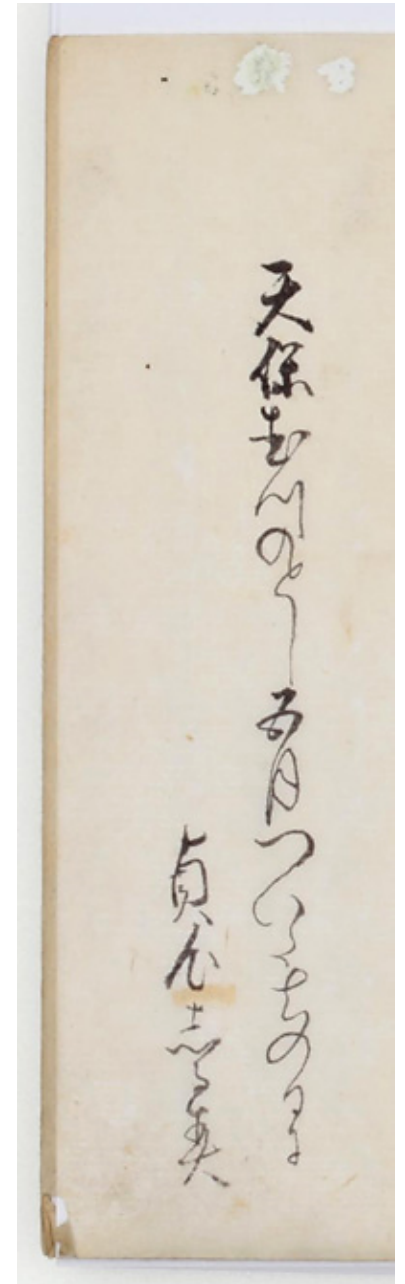
『蓮の露』本文の最後の部分



『蓮の露』本文の良寛・貞心唱和の歌の部分



『蓮の露』序文の最後の部分

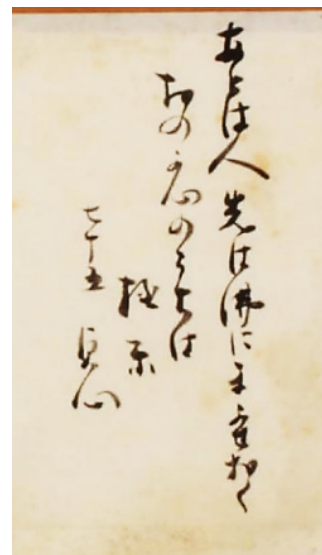


『蓮の露』序文の最後の部分

天保武川のとし五月つい多知の日尔 貞心志る春

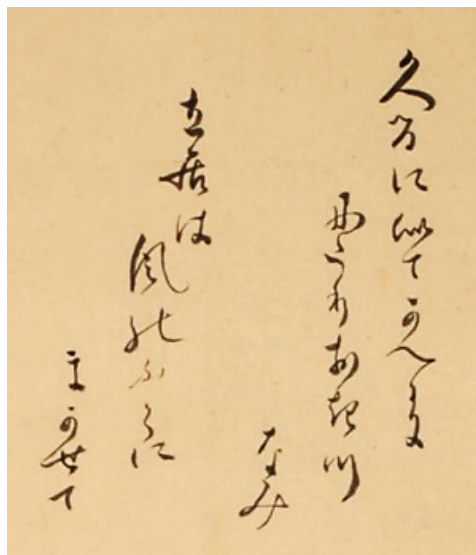
かく世はなれたる御身にしもさすがに月花のなさはすてたまは  
 はずよろづの事につけ折にふれては歌よみ詩つくりて其ころざ  
 しをのべ給へぬ。・・・さればかゝる歌どものこゝかしこにおちゝ  
 りて谷のうもれ木うづもれて世にくちなんことのいとをしけ  
 ればこゝにとひかしこにもとめてやうやうにひろひあつめまたお  
 のれが折ふしかの庵へ参りかよひし時よみかはしけるをまかきそ  
 へて一まきとなしつ。  
 こは師のおほんかた見とかたはらにおき朝ゆふにとり見つゝこし  
 かたしのぶすがにもとてなん。  
 天保六年五月一日に 貞心尼しるす  
**唱和の歌抄**（深い愛と信頼に結ばれた相聞歌）  
 師常に手まりをもてあそび給ふとききて奉るとて 貞心尼  
 これぞこの仏の道に遊びつつつきや尽きせぬ御法なるらむ  
 御かへし 師  
 つきてみよ一二三四五六七八九の十 十とをさめてまた始まるを  
 はじめてあい見奉りて 貞  
 君にかくあい見ることの嬉しさもまだ覚めやらぬ夢かと思ふ  
 御かへし 師  
 夢の世にかつまじろみて夢をまた語るも夢もそれがまにまに  
 いとねもごろなる道の物語に夜もふけぬれば  
 白妙の衣手寒し秋の夜の月なか空に澄みわたるかも  
 されどなほ飽かぬ心地して 貞  
 向かひめて千代も八千代も見てしがな空ゆく月のこと問はずとも  
 御かへし 師  
 心さへ変はらざりせば這ふ薦の絶えず向かはむ千代も八千代も  
 いざ帰りなむとて 貞  
 立ち帰りまたも訪ひ来むたまぼこの道の芝草たどりたどりに  
 御かへし  
 またも来よ柴の庵を嫌はずすき尾花の露を分けわけ  
 ほどへてみ消息給はりけるなかに 師  
 君や忘る道や隠るるこの頃は待てど暮らせどおとづれのなき  
 御かへし奉るとて 貞  
 こは人の庵に有りし時なり  
 ことしげき葎の庵に閉ぢられて身をば心にまかせざりけり

あとは人 先は仏にまかせおく  
おのが心のうちは極楽  
七十五 貞心



貞心尼「辞世の歌」

来るに似て 帰るに似たり おきつ波  
立居は風の吹くにまかせて



貞心尼「辞世の歌」

山の端の月はさやかに照らせどもまだ晴れやらぬ峰のうす雲  
御かへし 師

身を捨てて世を救う人も座すものを草の庵に暇求むとは  
久方の月の光の清ければ照らしぬきけり 唐も大和も昔も今も  
嘘も誠も

晴れやらぬ峰のうす雲立ち去りてのちの光と思はずや君  
春の初めつ方消息奉るとて 貞

自づから冬の日かずの暮れ行けば待つともなきに春は来にけり  
われも人も嘘も誠もへだてなく照らしぬきける月のさやけさ  
覚めぬれば闇も光もなかりけり夢路を照らす有明の月

御かへし 師

天が下に満つる玉より黄金より春の初めの君がおとづれ  
手に触るものこそなけれ法の道それがさながらそれにありせば

御かへし 貞

春風にみ山の雪は解けぬれど岩間によどむ谷川の水

御かへし 師

み山べのみ雪解けなば谷川によどめる水はあらじとぞ思ふ

御かへし 貞

いづこより春は来しぞと尋ぬれど答えぬ花にうぐひすの啼く  
君なくば千たび百たび数ふとも十づつ十を百と知らじを

御かへし 師

いざさらば我もやみなむこの毬十づつ十を百と知りせば

いざさらばかへらむといふに

霊山の釈迦のみ前に契りてしことな忘れそ世はへだつとも

御かへし 貞

霊山の釈迦のみ前に契りてしことは忘れじ世はへだつとも

師

あづさ弓春になりなば草の庵をとく出てきませ逢ひたきものを  
いついつと待ちにし人は来たりけり今は相見て何か思はむ

貞

生き死にの界離れて住む身にもさらぬ別れのあるぞ悲しき

・  
・  
・



しょうあ 照阿画「貞心尼病中図」軸部分

159.0×40.5 cm 柏崎市立図書館蔵

しょうあ 照阿は しょうん 静誉上人のこと、貞心尼と親しかった。英 舜 ともいった。

天保12年(1841)春、43歳 正式に得度の式をおえ、釈迦堂の庵主となった。

嘉永4年(1851) 53歳、柏崎大火により釈迦堂焼失。多くの人びとの寄進により不求庵を結んでもらい、二人の弟子と共に住んだ。ここが終生の住処となる。大火の後、その間の経緯を『焼野のひと草』として書きつづった。

慶応元年(1864) ころから『良寛道人遺稿』出版に尽力、慶応3年(1867)に刊行された。

これがわが国で最初の良寛詩集で、唯一の木版本である。良寛の肖像は貞心尼が原画を描いたといわれる。

明治5年(1872) 3月19日、貞心尼不求庵で寂滅。74歳。墓は柏崎市の洞雲寺裏山の墓地にある。

自家集『もしほぐさ』を残す。